

中田重治における日本人とユダヤ人の関係理解 —キリスト教シオニズムの一例としての考察—

石井田 恵
同志社大学大学院神学研究科博士後期課程

要旨

近年、キリスト教シオニズムは、世界情勢を理解する上で看過できないグループとして存在感を増してきている。キリスト教シオニズムは欧米だけでなく、日本にも存在する。中田重治(1870-1939)は、日本ホーリネス教会の源流となった伝道者である。中田はユダヤ人に強い関心を持ち、1932年以降、イスラエル主義への傾倒を強めた。そして、世界の終わりにイスラエルが回復され、その時、日本人が軍事のおよび宗教的な使命を果たすと主張した。

本稿ではイスラエル主義とも呼ばれる中田の晩年の思想を、日本におけるキリスト教シオニズムの一例として考察し、中田がユダヤ人の回復に救済史的意味を認め、ユダヤ人に過度な理想を投影していた可能性、さらにそれが多重的なユダヤ人理解を形成させ、結果的に、反ユダヤ主義を批判した中田を無意識的に反ユダヤ主義的にさせた可能性を指摘する。また、考察を通して、キリスト教シオニズムが一部のクリスチャンに支持されている理由、キリスト教シオニズムが抱える課題を明らかにすることを目指す。

キーワード

キリスト教シオニズム、中田重治、救済史観、選民思想、ディスペンセーション主義

**Juji Nakada's Idea about the Relationship
Between Japanese and Jews:
A Consideration of the Case of Christian Zionism**

Megumi Ishiida
Doctoral Student
Graduate School of Theology, Doshisha University

Abstract:

Christian Zionism is now becoming a prominent school of thought indispensable to understanding world politics. Christian Zionists exist not only in the West but also in Japan. Juji Nakada (1870-1939), one of the founders of Japan Holiness Church, was deeply interested in Jewish people and became Zionistic after 1932. He asserted that Israel would be restored in the end times and that Japan would play a role to help them militarily and religiously.

In this paper, Nakada's thoughts will be studied as one case of Christian Zionism in Japan. Though Nakada appreciated the Jewish people's significance in salvation history, his eschatological expectations toward them may have influenced his multi-faceted understanding of the Jewish people. As a result, even though he criticized anti-Semitism, Nakada unwittingly leaned towards anti-Semitism. Finally, we will discuss the reason why Christian Zionism is supported by some Christians, and the problematic nature of their ideas.

Keywords:

Christian Zionism, Juji Nakada, Salvation History, Elitism, Dispensationalism

1. はじめに

近年、キリスト教シオニズムは、世界情勢を理解する上で看過できないグループとして存在感を増してきている。立山良司によれば、アメリカにおけるキリスト教シオニスト団体の多くがイスラエルのための活動を展開している¹。在イスラエル米大使館のエルサレム移転の背景に、彼らの影響力があることは、多くの人々が指摘するとおりである。

キリスト教シオニズムは欧米だけでなく、日本にも存在する。日本のキリスト教シオニストによる活動は1920年代頃から展開されてきた。そこには大きく二つの潮流—(1)無教会派の流れに属する人物やグループと(2)ホーリネス教会の流れに属する人物やグループ—がある²。しかし、日本のキリスト教シオニズムに関する研究で中心的に扱われてきたのは(1)の無教会派の系譜に連なる人物やグループであった³。

中田重治(1870-1939)は、日本ホーリネス教会の源流となった伝道者である。中田はユダヤ人問題に強い関心を持ち、1918~9年にかけて内村鑑三らとともに再臨運動(大正のリバイバル)を行った。また、池上良正や役重善洋によれば、中田は1932年以降、イスラエル主義への傾倒を強めていった⁴。そして、世界の終わりにイスラエルが回復され、その時、日本人が軍事のおよび宗教的な使命を果たすと主張した。同思想は1933年のホーリネス教会分裂の一因ともなった⁵。

本稿ではイスラエル主義とも呼ばれる中田の思想を日本におけるキリスト教シオニズムの一例として考察する。そこで、まず同思想について瞥見した上で、中田がなぜイスラエルに特別の意味を見出し、日本がイスラエルに対して使命を持つと考えるに至ったのか、時代背景、思想的背景を概観する。さらに、中田のユダヤ人と日本人の関係理解に見られる多重性を指摘し、それが中田の反ユダヤ主義に対する二面性となって表れている可能性を指摘する。そして、最後にキリスト教シオニズムが一部のクリスチャンに支持される理由、キリスト教シオニズムが今日抱える課題を指摘することを目指す。

なお、資料としては主に1932年以降の中田の著作を用いる。『中田重治全集2』には、1932年以降の著作である『聖書より見たる日本』、『民族への警告』が収められているが、全集所収の版は、発禁処分等により改定が加えられた版であると見られる⁶。本論文では、改定が加えられる前の版を用いることとする。具体的には、中田重治『聖書より見たる日本』(第七版)、きよめ教会出版部、1938年、および中田重治『民族への警告』(第一版)きよめ教会出版部、1933年、を使用する。

2. 日本民族の使命とユダヤ人の位置

本章では、イスラエル主義とも呼ばれる中田の晩年の思想におけるユダヤ人の位置、そして軍事的使命と宗教的使命の内容について瞥見する。

『聖書より見たる日本』と『民族への警告』に記されている日本民族が担う使命の内容は、概ね以下のように要約できる。日本民族は(1)イスラエル人民の救いのために祈り、世界に散在しているイスラエル人に神の選民たる自覚を起こさせ、故国に帰還させ、彼らの建国を援助するために用いられる。それは主イエスの来臨を早め、平和の千年王国設立にまで影響することである。(2)世界の平和を攪乱する四大民族をおさえ、選民を救う使命を持つ。その時、世界を相手に戦い、大陸にも進出するであろう。

上記の使命は、中田自身が使用した用語ではないが、それぞれ(1)宗教的使命、(2)軍事的使命と言い表せよう。そのため、本稿でもこれらをそれぞれ宗教的使命、軍事的使命と呼ぶ。宗教的使命と軍事的使命は本来異なる性格を持つものである。というのも、軍事的使命は人間的な努力を強調するものであり、宗教的使命は再臨による解決を待つものだからである。中田は二つの使命の関係をどのように理解していたのであろうか。

中田は、自身らは非戦論者ではないと宣言する⁷。そして、聖書無謬説⁸的聖書解釈を基に、神はハルマゲドンの戦いをやめさせるために日本の軍備を用いるとして、軍備増強を正当化している⁹。さらに、艱難時代に起こるであろう世界的大戦争の時に日本民族が世界を相手に戦い、平和を乱すものをおさえるために大陸に進出すると説く¹⁰。

ただ、中田は日本の参戦が最善の選択と考えていなかったようにも思われる。というのも、中田は「徒らに日本の大陸政策を謳歌するのでもなければ、軍部に阿諛して居るのでもない」¹¹、「決して戦争を礼賛する者ではない」¹²と繰り返し主張しているからである。そして、「感謝すべき事には其時〔ハルマゲドンの大戦争、あるいはその序幕となる戦争の際〕日本は傍観的態度を取る」¹³とも述べている。

さらに、中田は、平和は人間の手では実現できず、真の平和が訪れるには、キリストの再臨を待たねばならないと考えていた¹⁴。『聖書より見たる日本』の最終章においては、我らは一日も早く主の再臨と裁きが行われるよう祈り求めなければならないと強調している¹⁵。そして、再臨にいつさいの解決策としての期待を寄せる¹⁶。中田にとり、真の平和の到来とは、「千年王国」の到来に他ならなかった。その期待は、切迫した終末観となって表れている。たとえば、再臨は切迫している¹⁷、主イエスはすぐおいでになるため偶像から離れなければならない¹⁸、末の世のしるしを見せられている¹⁹といった発言をしている。その他にも、現実に

起こるものとして再臨を待望するという旨の発言一近々、キリスト信者の携挙が起こる²⁰、患難時代は必ず近々全世界に臨むといった発言一が目立つ²¹。「我等は世界の平和はどうしても義の太陽、平和の君なる基督が再臨するのでなければ来たらぬことを知つて居る」と述べているように、中田は真の世界平和はキリストの再臨によって成就すると考えていた²²。

さらに、ユダヤ人の故国への帰還は終末の予兆と理解された。たとえば、中田は「猶太人が目醒め出して来たならば、此時代の終が近いことを知つて備へせよ」²³と説いている。そして今現に、目覚めたユダヤ人が「続々其本国に帰りつつある」という²⁴。加えて、中田は「イスラエルが救はれ、故国に帰る事は主イエスの再臨を早める」と考えていた²⁵。中田が真の世界平和はキリストの再臨によってのみ成就すると理解していたことに鑑みれば、キリストの再臨を早めるというユダヤ人の故国帰還にも重要な意味が付与されていたと見てよからう。

以上で概観したように、中田は日本民族がユダヤ人に対して軍事的使命と宗教的使命を負っていると説いた。しかし彼は、すべての問題を解決しうるのは再臨のみであり、再臨はユダヤ人の故国への帰還によって早められると考えていた。救済史において重要な意味を持つイスラエルの回復に対して日本民族が使命を持つとする思想は、日本民族を救済史の中に位置付ける試みであったとも言える。

3. 思想的背景と時代背景

ユダヤ人の回復に特別の意味を付与する終末観は、ディスペンセーション主義に基づくものであると考えられる²⁶。ディスペンセーション主義とは、1830年代に元アイルランド国教会牧師のジョン・ネルソン・ダービー(John Nelson Darby: 1800-1882)によって提唱された前千年王国説であり²⁷、ユダヤ人のパレスチナへの帰還を終末にいたる予定表の中に位置付けることを特徴の一つとする思想である。ディスペンセーション主義は、シオニズムを擁護する理論であった。そして、シオニズムも、ディスペンセーション主義の正当性を擁護するかのような形で隆盛した²⁸。それは、聖書と「今」を結びつける一つの根拠となった。

本章では、なぜ中田がイスラエルに特別の意味を見出し、日本がイスラエルに対して使命を持つと考えるに至ったか、その理由について時代背景、思想的背景を中心に考察する。

3-1. アメリカにおけるディスペンセーション主義

森孝一によれば、ディスペンセーション主義は、1870年代以降のアメリカで受け入れられた²⁹。19世紀前半のアメリカを支配していたのは、楽観主義的かつナ

シヨナリストティックな色彩の強い、後千年王国説であった³⁰。しかし、1870年代以降のアメリカにおいて、(1)工業化にともなう都市の発達と移民の急激な増加、また1873年以降の恐慌と労働争議の増加、1880～90年代の人種暴動、暴力を伴う労働運動などの頻発、(2)思想状況における新しい波—進化論、聖書批評学、比較宗教学等—の到来により、伝統的なプロテスタント中産階級の価値観がゆるがされ、彼らは危機感を覚えた³¹。このような中、ディスペンセーション主義が拡大していった。

さらに、アメリカにおけるディスペンセーション主義は、その後、独自の変容を遂げた。元来、ニューイングランドの正統的なカルヴィン主義的信仰理解からすると、ホーリネスは救いにおける神の恵みの絶対唯一性を否定するものであり、異端的に映った³²。しかし、D・L・ムーディー(Dwight L. Moody: 1837-1899)はノースフィールド・カンファレンスを通して、ホーリネスの教えを当時の前千年王国主義者の間に定着させた³³。前千年王国主義者は異言を語ることの中に千年王国の前兆を見、ホーリネスの人々は、個人の魂と社会の浄化の中に聖霊の働きを見たという³⁴。

また、森によれば、前千年王国主義は世界と歴史に対して分離主義の立場をとり、政治や社会改革から自らを分離しておくことに努める。そのため、分離主義は時として平和主義に進む。ところが第一次世界大戦を境に、アメリカにおけるディスペンセーション主義は、軍備、戦争を支持する立場を取り始めたという³⁵。森は、アメリカにおけるディスペンセーション主義の軍備、戦争に対する積極的立場への移行は、戦時下のヒステリー現象によっておこってきた「非国民」という非難に起因した、と指摘している³⁶。

中田が再臨を待望するだけではなく、自民族の軍事的使命を説くに至った背景にはホーリネス教会に対する「非国民」という批判の高まりがあったのではないか。ホーリネス教会に対する迫害は1939年中田の死後、激しさを増し、1942年にホーリネス系教会の一斉検挙が起こっている³⁷。ただ、それ以前から、ホーリネス教会に対する迫害は始まっていた。米田勇によれば、1928年には幹部の一人の息子が靖国神社参拝を拒否したことによって退学を要求され³⁸、1930年4月には、満州南部の安東高等女学校に通うホーリネス信者の生徒4名が神社参拝を拒否したことに端を発する一連の紛争が発生している³⁹。同年9月ごろにも、第二の安東事件ともいべき迫害事件が山陰の浜田の女子師範学校で起こっている⁴⁰。このようなホーリネスを取り巻く環境の変化は、中田が軍事的使命を説くに至る要因になったと考えられる。

3-2. 中田に見られるディスペンセーション主義の影響

中田は青森県弘前市に生まれ⁴¹、17歳頃に受洗した⁴²。東京英和学校（のちの青山学院）に学んだが、成績不良で退学となる。しかし院長本多庸一の計らいにより千島に伝道師として赴き、1894年に按手礼を受けた。そして、1896年末に渡米し、ムーディー聖書学院の短期コースを終了した⁴³。役重は、中田がムーディー聖書学院で学んだ神学は、ディスペンセーション主義と結合したホーリネス信仰であったと述べている⁴⁴。

中田は帰国後、すぐさまディスペンセーション主義を強調することはなかった。しかし、1917年10月、新教団設立に伴い、初代のホーリネス教会の監督となり、ダービーの弟子の一人であるウィリアム・ユージン・ブラックストン(William Eugene Blackstone: 1841-1935)の著作 *Jesus is Coming* (1878)の邦訳『耶蘇は来る』を出版した⁴⁵。役重によれば、これはホーリネス教会の主要テキストの一つとなったという⁴⁶。1918年から、中田は内村鑑三、木村清松らとともに再臨運動を行った⁴⁷。米田によれば、1918年の講演会では「日出ずる国より昇る天使」と題して、日本国民にもキリストの再臨に関する使命があると説かれたという⁴⁸。中田がディスペンセーション主義を強調し始めた初期の段階で、すでに日本人の使命にも関心を持っていたことが窺える。

ディスペンセーション主義に基づく再臨思想は、日本人の使命が高唱されるようになってからも、強められた。1930年、31年にホーリネス教会でおこったリバイバル、1932年11月の講演「聖書より見たる日本」、また1933年に行われた「民族への警告伝道」もディスペンセーション主義の再臨信仰を共有しており、信徒らも再臨への期待を高めた⁴⁹。ブラックストンによる『耶蘇は来る』の50銭の廉価版も発行され、前千年王国思想が力説された。日本民族の使命を強調するにあたって、ディスペンセーション主義は強められていった⁵⁰。

以上、中田がアメリカでディスペンセーション主義とホーリネス信仰が融合した神学に触れ、これを基に日本民族の使命を自覚していったと述べた。彼の再臨信仰はディスペンセーション主義に基づくものであったと考えられる。ただ、中田は日本民族が宗教的使命のみならず、軍事的使命も持つと説いた。アメリカのディスペンセーション主義は戦時下のヒステリー現象によっておこってきた「非国民」という非難によって軍備、戦争を支持する立場を取り始めた。中田が日本民族の軍事的使命を高唱するようになった背景にも、日本における国粹主義的機運の強まり、ホーリネスに対する「非国民」という非難の高まりがあったと考えられる。

4. ユダヤ人と日本人の関係理解に見られる多重性

中田は日本人のユダヤ人に対する使命を強調したが、当時の日本人にとって、ユダヤ人は遠い存在であった。日本は1933年のドイツにおけるナチス政権成立まで、政府レベルでユダヤ人問題に向き合うことはなかった⁵¹。1938年12月に五相会議で、日本外交の基本方針として、英米との対立回避のための政治宣伝、あるいはユダヤ系米国資本の導入を目指した「ユダヤ人利用」の原則が定められたが⁵²、その原則も1942年には破綻している⁵³。宮澤正典は、日本政府が一貫して、ユダヤ人を排斥する必然性はないとしていた理由に、ユダヤ人が日本人にとって身近な存在ではなかったこと等があると指摘している⁵⁴。

中田は、日本人にとって遠い存在であったユダヤ人と、日本人の関係をいかに理解したのか。中田のユダヤ人と日本人の関係理解を表す語を挙げるとすれば、日ユ同祖論、「セム族」、選民と非選民、が挙げられる。以下では、その関係理解に見られる多重性から、中田がイスラエルに特別な意味を見出した理由について考察する。

4-1. 日ユ同祖論

中田のユダヤ人と日本人の関係理解について、日ユ同祖論を抜きにして語ることは困難である。中田は度々ヘブライ語と日本語の類似性に言及し⁵⁵、ユダヤ人が日本に渡来したことには歴史的根拠があり、日本民族には、ユダヤ民族の血が混じっていると主張する⁵⁶。

宮澤によれば、中田の同祖論は、主に佐伯好郎「太秦を論ず」および小谷部全一郎『日本及日本国民之起源』の主張をベースにしたものであるという⁵⁷。ただ、中田は、佐伯や小谷部と異なり、同祖論を再臨の使命に関係づけて信仰の世界に持ち込んだ点で特徴的であったという⁵⁸。中田は、聖書中に記されている「東」、「日のいづる處」を日本と同定し、それらが日本に関する預言であると考えた。たとえば黙示録7:2の「東より上り来たる天の使い」を日本国民のことでありと見なし⁵⁹、詩篇50:1、113:3、イザヤ59:19、マラキ1:11の「日のいづる處」も日本についての記述であると解釈した⁶⁰。中田は、このような聖書解釈を基に日本人の使命について語った。

中田は日ユ同祖論を支持する一方で、日本人＝ユダヤ人ではないとする。たとえば、彼は英米におけるアングロ・イスラエル主義一すなわち、現在全世界に散在する英国並びに米国人が失われたイスラエルの十族であるという説一に関連して、「我等は決して日本・イスラエル主義を唱へて居るのではない」と述べる⁶¹。そして、「只英国人の中に失はれた十族の或一部が雑つたことは事実である様に、日本にもイスラエルの血の流れが入つたといふだけであつて、日本人そのものはイ

スラエルの十族であるなど主張する者でない」と続ける⁶²。

日ユ同祖論は中田の主張を理解するのに欠かせない理論である。一方で、それが中田の思想に占める位置を過大評価することにも慎重であるべきではないか。中田は「我等は大和民族がイスラエルと血の関係あらうがなからうが聖書の上より見て彼等の為に祈り且盡さねばならぬ事を高調するのであつて、若し血の関係があるとすれば尚更の事、彼等を援助するのは当然であるといふのみである」⁶³と論じている。つまり、彼の主眼は同祖論の正当性を立証することに置かれていたのではなく、同祖論を根拠として日本人が使命を持つと主張することに置かれていたと言える⁶⁴。

4-2. 「セム族」としての同族意識

中田は日本人とユダヤ人は同じ「セム族」であると考えていた。なお、ここで中田の言う「セム族」とは言語学的集団のことではなく、創世記に登場するセム、ハム、ヤフェトの「セム」のことである。

創世記 9:18-19 に「この三人はノアの子らで、全地の民は彼らから出て、広がったのである」とあり、10 章にはセム、ハム、ヤフェトの系図が記されている。これをもとにセム、ハム、ヤフェトを黄色人種、黒色人種、白色人種に当てはめる解釈がある⁶⁵。中田もセム、ハム、ヤフェトを黄色人種、黒色人種、白色人種に当てはめて理解していた⁶⁶。

また、中田は「東洋人」と「西洋人」を対照させ、「最初人種は或高原より東へ東へと降つたものと、西へ西へと降つたものとあり、其東へ東へと降つた者が東洋人で、西へ西へと降つた者が今の西洋人である」と述べている⁶⁷。彼は早稲田大学教授の西村真次による「東方憧憬」説一すなわち「凡て人類は太陽に対する一種の憧憬を持ち、日の出づる処を憧れて東へ東へと移つて行つた」⁶⁸とする説を紹介している。これは、西へ西へと進むアングロサクソン主義に対するアンチテーゼとして理解できる。

中田は「黄色人種・東洋人・アジア人」の対立概念として「白色人種・西洋人・ヨーロッパ人」を想定していたであろう。たとえば、中田は国際連盟が「偽キリストの先駆者」として、日本は「列国」の御機嫌を取っている場合ではなく、「亜細亜は亜細亜人のものである。彼等は彼等でやればよい」と述べ⁶⁹、国際連盟に代わる、黄色人種連盟が将来できるであろうと主張する⁷⁰。さらに、各国の白色人種は彼らが抱いている白人優越主義を破られまいと「黄色人種の代表ともいふべき日本」⁷¹をおさえつけようとしていると説く。

また中田は「白色人種・西洋人・ヨーロッパ人」を中心とする聖書解釈も批判している。たとえば、これまで、聖書における「日本に関する事柄」は、白人本

位的な聖書解釈がなされてきたことによって隠されてきたと主張する⁷²。中田は聖書における日出る国や、東の島々という言葉をもとに日本と結びつけて解釈し、それらの預言を「日本に関する事柄」と理解していた⁷³。黙示録やその他の預言書の預言は白人本位で解釈すべきでなく、ユダヤ人を中心にして解釈すべきで、広い心をもって見ねばならないという⁷⁴。

では、中田は日本人とユダヤ人との関係をどのように捉えていたのか。彼は日本人とユダヤ人が同じアジア人であるという認識を持っていた。たとえば、「我等〔日本人〕が極東のアジア人とすれば、彼等〔ユダヤ人〕は極西のアジア人である」⁷⁵、また「同じセム族であるが故に、我国が武力を以て彼を助けるとするならば、彼は金力を以て我に報いると想像することはさほど困難でない」⁷⁶といった発言には、同じアジア人、「セム族」としてのいわば同族意識が見られる。この同族意識は、神認識にも反映されている。たとえば、全世界に伝えられた「セムの神」は「即ちアジア人の神なるエホバ」であると述べている⁷⁷。

以上、中田の主張から、彼がユダヤ人と日本人を同じ「黄色人種・東洋人・アジア人」と捉えていたであろうこと、そして「黄色人種・東洋人・アジア人」の対立概念として「白色人種・西洋人・ヨーロッパ人」を想定していたのであろうことが指摘される。

4-3. 選民ユダヤ人と非選民

中田はユダヤ人を選民と認めていた⁷⁸。ユダヤ人を選民と認めることは、同時に非選民の存在を認めることを意味する。非選民とは、すなわち非ユダヤ人を指す。中田は「ユダヤ人以外の世界の間人を総称して異邦人、英語では *Gentiles* と呼ぶ」と定義している⁷⁹。中田は、欧米人は「日本人や支那人やアフリカ土人等」のことを異邦人と呼び、キリスト教国である彼ら自身は「その籍を脱し」ていると主張していることを批判する。そして、「ユダヤ人ならざる者は、何国人たるを問はず、凡て異邦人」とであると述べる⁸⁰。彼はユダヤ民族という一つの民族の「選民」を認めることによって、それ以外の民族が等しく非選民であると主張した。

さらに、中田は、神は「世界の人を平等に愛し給ふ」と説く⁸¹。そして、すべての民族は祝福を受けると主張する。たとえば、「神ヤペテを大ならしめたまはん」という聖書箇所を根拠に、「過去幾世紀か神の祝福はヤペテの子孫の上に置かれ、白人は世界の果々にまで手を伸ばす様になった」と述べた上で⁸²、セムの上にも祝福があると説く⁸³。

加えて、中田は聖書の記述を基に、各民族にはそれぞれ使命が与えられていると主張する。そして、日本民族のみが特別に使命を与えられているわけではないとする⁸⁴。たとえば、中田は伝道の使命に関して、「初はエテオピア人の如き黒色

人種が用ひられ、次に白色人種によりて福音が宣伝へられたが、神は今や黄色人種に使命を賦けて用ひんとして居給ふと思われる。強ち黄色人種が偉いからではなく、万物を支配し給ふ神が崇められ給はんが為に、今や黄色人種の上に神の御手が置かれてある」⁸⁵と。

中田は西欧における「異邦人」理解を批判する中で、ユダヤ民族の選民たるを認め、非ユダヤ人は等しく非選民であると主張した。彼が、神が世界の人を平等に愛し、すべての民族が祝福を受け、すべての民族が使命を持つと説いたことに鑑みれば、中田はユダヤ民族以外のすべての民族の平等—ただ、中田の念頭にあったのはアジア人と欧米人の平等であろう—を訴えようとしていたと考えられる。

以上、本章では中田がユダヤ人と日本人の関係をいかに理解していたのかについて論じた。中田は、ユダヤ人と日本人が同じアジア人であるという意識を持っていた。しかし一方で、ユダヤ人を選民、また日本を含めるそれ以外の民族を異邦人と定義し、非ユダヤ人である民族間の平等を規定した。また、日ユ同祖論は、日本人がユダヤ人に対する、そして救済史に対する使命を持つことの根拠とされた。中田は自身の理想—西欧とアジアの間の平等、救済史の中で役割を果たす日本人—を遠い存在であったユダヤ人に投影したのではないか。

5. 反ユダヤ主義に対する中田の態度の二面性

シオニズムは反ユダヤ主義の台頭に伴い本格化していった。勝又悦子によれば、近現代ユダヤ教において宗教に対する立場の二極化が進行した⁸⁶。東欧では敬虔主義運動が拡大した。一方、西欧・アメリカ合衆国では居住する国家の国民としての意識が高まり、ユダヤ教から改宗、同化する者が現れた⁸⁷。しかし、二極化が進む中で、いずれの運動も反ユダヤ主義の台頭に直面することとなる。ロシア帝国領内ではユダヤ人迫害（ポグロム）が頻発し、同化が進んだはずのフランスでも、1894年にフランス陸軍参謀本部のユダヤ人大尉アルフレド・ドレフュスがスパイ容疑で逮捕されるドレフュス事件が起こった。さらにドイツでは1933年にナチス政権が成立し、ユダヤ人社会に対する暴力を伴う対ユダヤ政策が四つの段階を踏んで実行された⁸⁸。反ユダヤ主義の根深さが露呈される中、ヨーロッパ以外の地にユダヤ人国家の建設を目指すシオニズム運動が本格化していった⁸⁹。

中田は世界的な反ユダヤ主義の高まりを批判した。ただ、中田自身も無意識的に反ユダヤ主義的傾向を有していた。以下では、中田の反ユダヤ主義に対する矛盾する態度—反ユダヤ主義批判と、自らの無意識的反ユダヤ主義的傾向—を指摘し、今日に通ずるキリスト教シオニズムの課題を明らかにしたい。

5-1. 反ユダヤ主義批判

中田は西欧における反ユダヤ主義を批判し、日本が同様の反ユダヤ主義に陥らないようにと述べた。中田はドイツにおける反ユダヤ主義について度々言及している。たとえば、ヒトラーが「猶太人くたばれ、パレスチナに帰れ」というスローガンをもって盛んに反ユダヤ熱を煽っていること、また、彼が内閣を組織した場合にユダヤ人の財産を政府が没収すると説いていることを批判している⁹⁰。また、ロシア⁹¹、英国⁹²、米国⁹³においても反ユダヤ主義が存在しており、程度の差こそあれ「四大人種」が皆反ユダヤ主義に加担していると指摘する⁹⁴。そして、近年の日本における反ユダヤ主義の高まりに、警鐘を鳴らす⁹⁵。

中田の批判は、キリスト教界における反ユダヤ主義にも向けられる。たとえば、中田は「欧米人は猶太人に対して天主教に依りて吹込まれた偏見を持つて居る」とし⁹⁶、反ユダヤ主義的傾向がカトリックにあったと指摘する。また、教会が愛を説きながら、ユダヤ人を虐殺してきたこと、そして彼らを苦しめてきたことを断罪している⁹⁷。

さらに、中田は置換神学的な聖書解釈も否定している。マーク・R・アムスタッツによれば、置換神学とは、キリストが現れたとき、神はユダヤ人とその土地を気にかけることをやめ、新しい契約の下で、イスラエルは「新しい」イスラエル、すなわちイエスを救世主であり神であると信じるすべての人間から成るキリストの教会に置き換えられたとする考えである⁹⁸。中田は、「彼等〔英米人〕の引用する聖句といふものは、盡くイスラエル人に関したものを自分等に当嵌めて考えて居るので、誠に得手勝手な解釈が多い」⁹⁹と置換神学的聖書解釈を批判している。中田にとって、黙示録やその他の預言書の預言は白人本位で解釈すべきでなく、ユダヤ人を中心にして解釈すべきものであった¹⁰⁰。そして、在来の註釈家は白人中心に偏していたと指摘する¹⁰¹。中田は、イスラエルの選びは取り消されておらず、ユダヤ民族は回復されると説いた。

中田が反ユダヤ主義に対する問題意識を持った理由の一つとして、米国における排日運動が投影された可能性が指摘される。中田は『聖書より見たる日本』の中で、欧米における排日運動について論じている。「今迄は世界の人々は日本人を賤しめて排斥したものであるが、今日に於いては此人種は驚くべき人種であるとして底気味悪く感じ、之を危険視して排斥するやうになつた」と¹⁰²。中田は、排日運動について論ずる直前に、ユダヤ人と日本人に共通する優れた点を指摘している¹⁰³。中田は「優れているために排斥されるユダヤ人」に「優れているために排斥される日本人」の姿を重ね合わせたのではないかと推察される。

また、中田による反ユダヤ主義批判は、反ユダヤ主義に加担してきた欧米諸国と、それに加担していない日本人との対照をなす形で展開されている¹⁰⁴。そして

「此民〔ユダヤ人〕に神の選民であるとの自覚を明白ならしめて結びつけ、而して其故国に帰るやうにするのが、彼等を虐めて居る欧羅巴人ではなくして、我等大和民族である」¹⁰⁵という主張にも表れているように、世界の強国の中でもユダヤ人を迫害しない日本が、ユダヤ人に対して使命を持つと理解した。

以上で概観したように、中田の反ユダヤ主義批判はいわゆる人道的観点からなされるものとは性質を異にしていた。彼は、排日運動と反ユダヤ主義の間に類似性を見出し、ヨーロッパにおける反ユダヤ主義を批判した。また、日本が反ユダヤ主義に加担してないことを、日本民族が特別の使命を持つ根拠の一つとした。

5-2. 反ユダヤ主義的性格

中田は反ユダヤ主義批判をしつつも、自身の反ユダヤ的性格に無自覚であった。中田はユダヤ人を迫害してはならない理由として、「大多数の猶太人は、真面目に聖書を信じ、今尚メシヤ（救主）の来臨を待つて」¹⁰⁶おり、「彼等の願ふメシヤは我等の現に待望んで居る再臨のキリストである」¹⁰⁷ことを挙げている。しかし、ユダヤ人が待ち望んでいるメシヤと、一部のキリスト教徒が待ち望む再臨のキリストが同じものであるとの主張は、当時も現在も大多数のユダヤ人にとって受け入れられるものではなかろう。また、杉田六一も、中田による「自民族の利益のためにユダヤ人のために祈れ」や、「ユダヤ人を呪えば、呪われる」¹⁰⁸などの主張は、一種の強迫観念であり、親ユダヤというよりも反ユダヤ主義を思わせると指摘している¹⁰⁹。

このように、中田は反ユダヤ主義を批判しつつも、自身の反ユダヤ主義的性格には無自覚であった。彼は終末論的期待や、アジアと欧米の間の平等実現への期待を持ち、自身の聖書理解に基づいて反ユダヤ主義を批判した。ただ、ユダヤ人に対する自身のユダヤ人観、ステレオタイプの押し付けは、反ユダヤ主義的でさえあった。現在のキリスト教シオニズムも、ユダヤ人に対する過度の期待感が持つ危険性と決して無縁ではない。

6. おわりに

中田のユダヤ人理解は多重的であった。この多重的なユダヤ人理解は、中田の様々な理想が投影された結果、形成されたように思われる。まず、中田はユダヤ人の選民たるを認め、シオニズムの勃興—ユダヤ人の故国帰還に、終末の前兆、再臨を早めるものとしての意味を付与した。また、日本人が、その特別な民であるユダヤ人に対して使命を持つと説き、日本を救済史という世界史の中に位置付けた。

日本人が反ユダヤ主義に加担していないという主張や、日ユ同祖論は、日本人がユダヤ人に対する特別の使命を負うことの根拠となった。日本民族が宗教的使命のみならず軍事的使命も負うと中田が主張した背景には、ホーリネスに対する「非国民」という非難の高まりもあったと考えられる。

さらに、中田はユダヤ人と日本人が同じアジア人であるという意識を持ちながらも、ユダヤ人は選民であるが日本人は非選民であるとして、両者を区別した。また、ユダヤ民族以外の民族は日本人を含め等しく非選民であり、すべての民族は平等であると説いた。これらの主張や、西欧における反ユダヤ主義に対する批判の背景には、アジアと欧米の間の平等実現への期待もあったと思われる。

このように、彼は自身の理想—救済史の中で役割を果たす日本人の姿、西欧とアジアの間の平等実現の希望—を遠い存在であるユダヤ人の中に見たのではないか。ただ、過度な理想の投影はやや利己的なユダヤ人理解、あるいは非自覚的な反ユダヤ主義的傾向を生み出すことになった。今日のキリスト教シオニズムも、一方的な期待の投影が持つ危うさに、自覚的である必要がある。

さて、本稿で考察を加えた中田のイスラエル主義はホーリネス教会に分裂をもたらした。しかし、一方でリバイバルももたらした¹¹⁰。使命を果たすことにより救済史に参加するという中田の思想は、ある一定数のクリスチャンの支持を得た。このような歴史観は、今日においても多くのキリスト教シオニストを惹きつけている。人類の救済という神の計画の中に、自らの使命—明確な人生の目標を見出すことで、個人の人生を凌駕する歴史への参加が可能になる。そのことにより、個人の生は新たな意味を持つことになる。

しかし、このような歴史観は、異なる歴史観を持つ他者との対話を拒否させがちであり、またその歴史観を共有しないものを排除しがちである。第二次世界大戦以降、中東問題はさらに複雑化している。キリスト教シオニストは、特定の救済史観への固執が持つ危険性についても認識することが求められている。

推薦者：小原 克博
同志社大学神学部教授

註

¹ 立山良司によれば、活動の力点は、概ね(1)イスラエル支持拡大のための言論や広報活動、米国の行政府や議会に対するロビー活動、(2)イスラエルにおける福祉活動やユダヤ人のイスラエルへの移民促進、(3)占領地における入植活動支援、(4)東エルサレムに対するイスラエル支配継続の支持、の四分野に大別できるという。立山良司『ユダヤ

- とアメリカ—揺れ動くイスラエル・ロビー』中公新書、2016年、207-14頁を参照。
- ² 戦前の(1)無教会派の人物、あるいはその流れに属する人物には、内村鑑三、矢内原忠雄、藤井武等がいる。(2)ホーリネスの人物には中田重治がいる。戦後の(1)無教会派の流れに属するキリスト教シオニストには、キリストの幕屋の手島郁郎、(2)の人物には旧きよめ教会の人々や、きよめ教会の流れに属する聖イエス会の大槻武二がいる。
- ³ 臼杵陽や村山盛忠は無教会運動を中心とする日本的キリスト教の流れから生れる系譜を紹介している。また、マーク・R・マリNZや宮澤正典、役重善洋は、ホーリネス教会の流れに属する人物やグループについても論じている。臼杵陽「日本におけるシオニズムへの関心の端緒—日露戦争から大戦間期までを中心に」、臼杵陽監修『シオニズムの解剖—現代ユダヤ世界におけるディアスポラとイスラエルの相克』人文書院、2011年。村山盛忠「キリスト教シオニズムの構造：日本人にとってのイスラエル」広河隆一、パレスチナ・ユダヤ人問題研究会編『ユダヤ人とは何か—「ユダヤ人」I』三友社出版、1985年。マーク・R・マリNZ（高崎恵訳）『メイド・イン・ジャパンのキリスト教』トランスビュー、2005年。宮澤正典『近代日本のユダヤ論議』思文閣出版、2015年。役重善洋『近代日本の植民地主義と非ユダヤ人シオニズム—内村鑑三・矢内原忠雄・中田重治におけるナショナリズムと世界認識』京都大学、2016年、博士論文。
- ⁴ 池上良正「ホーリネス・リバイバルとは何だったのか」杉本良男編『キリスト教と文明化の人類学的研究』人間文化研究機構国立民族学博物館、2006年、33-69頁、63頁。役重善洋「中田重治のユダヤ人問題理解とホーリネス教会の満州伝道」『社会システム研究』18、2015年、171-186頁、176-7頁。
- ⁵ 土肥昭夫によれば、車田を始めとする聖書学院の5人の教授は、イスラエル建国のための祷告や民族的救済観はホーリネスの聖書主義や新生、聖化の教理に一致しないと反論し、ホーリネス教会は分裂した。土肥昭夫『日本プロテスタント・キリスト教史』新教出版社、1994年、339頁を参照。
- ⁶ 『中田重治全集2』所収の「聖書より見たる日本」、「民族への警告」の底本が第何版であるかは示されていない。ただ、「民族への警告」に関しては、文章が再訂版と一致していることから同書に所収されているのは再訂版と推定される。
- ⁷ 中田重治『民族への警告』（第一版）きよめ教会出版部、1933年、22頁。
- ⁸ 藤本龍児『アメリカの公共宗教—多元社会における精神性』NTT出版、2009年、75頁。藤本によれば、「聖書無謬説」は「直解主義」とは異なったものである。原理主義者の聖書解釈には、文字通りに解釈されている部分とそうでない部分が混在している。そして、彼らにとって重要なのは、聖書にはいかなる種類の誤りも含まれていない、という点であるという。
- ⁹ 中田によれば、ハルマゲドンとは患難時代に起こる全世界にわたる大戦争であり、パレスチナ付近を中心として起こるといふ。中田重治『聖書より見たる日本』（第七版）、きよめ教会出版部、1938年、111頁を参照。また、中田はダニエル11:40-45を根拠に、北の王と南の王との戦争が起こり、これがハルマゲドン大戦の序幕となるのではないかと述べている。なお、北の王とはスラブ、チュートンの連合軍、南の王はアングロ

サクソンとラテンとの連合軍を指すという。同書、146 頁を参照。彼らは南北に分かれて相争い、世界の平和を攪乱するが、日本がこれをおさえるという。『民族への警告』、23-4 頁を参照。

- ¹⁰ 同書、63-4 頁。イザヤ 41 章や 46 章に見られる、東より起こる人、もろもろの国を征服するという記述が根拠として挙げられている。『聖書より見たる日本』、114 頁。その他にも、鷲が全ての国を征服するという内容が見られる黙示録 19 章も根拠として言及されている。なお、中田は鷲を飛行機と解釈していた。同書、152 頁を参照。
- ¹¹ 同書、114-5 頁。
- ¹² 同書、142 頁。
- ¹³ 同書、145 頁。
- ¹⁴ 同書、141、170 頁。
- ¹⁵ 同書、155-63 頁。その他に、中田は再臨に関するホーリネス教会の使命—日本民族に対し再臨が近いことを警告する使命や、キリストの再臨を早める使命—も自覚していた。『民族への警告』、100-2 頁を参照。
- ¹⁶ 同書、26、92、106-7 頁。
- ¹⁷ 同書、9、106-7 頁。
- ¹⁸ 同書、51 頁。
- ¹⁹ 同書、67、69-70 頁。
- ²⁰ 同書、113 頁。
- ²¹ 同書、128 頁。
- ²² 同書、9 頁。
- ²³ 『聖書より見たる日本』、90-1 頁。
- ²⁴ 同書、91 頁。
- ²⁵ 同書、103 頁。
- ²⁶ 『民族への警告』、9 頁。
- ²⁷ Hubers, John. "Christian Zionism: A Historical Analysis and Critique." Paper submitted to the RCA General Synod, 2004, 1-21, 6. Available at: https://www.academia.edu/11026498/Christian_Zionism_An_Historical_Analysis_and_Critique. (Accessed on 21 January 2019.)
- ²⁸ イスラエルへの帰還（アリヤ）を目指すユダヤ人が増加し、1933 年には三万八千人という未曾有の数字に達し、34 年、35 年も、さらなる増加を見せた。アリヤについては、ウォルター・ラカー（高坂誠訳）『ユダヤ人問題とシオニズムの歴史』第三書館、1987 年の 112 頁（第一アリヤ：1881-82）、396-7 頁（第二アリヤ：1904-14）、419 頁（第三アリヤ：1919-23）、449 頁（第四アリヤ：1924-1926）、456 頁（第五アリヤ：1932-1939）を見よ。
- ²⁹ 森孝一「アメリカにおけるファンダメンタリズムの歴史」『基督教研究』46(2)、1985 年、192-244 頁、205 頁。
- ³⁰ 千年王国思想は、千年王国とキリスト再臨の時期との関係理解により、前千年王国説と後千年王国説に分けられ、後千年王国説は教会の努力により千年王国が打ち立てら

れた「後に」キリストが再臨すると考える立場であり、楽観主義的色彩が強い。同書、198-9、201-2 頁を参照。

³¹ 同書、201-2 頁。

³² 同書、208、211 頁。

³³ なお、ノースフィールド・カンファレンスとは、1880 年より毎年、ムーディーによって開かれていたもので、1886 年以降は、ナイアガラ・カンファレンスの前千年王国主義者によって運営されるようになっていた。同書、212 頁を参照。Sizer, Stephen R. *The Promised Land: A Critical Investigation of Evangelical Christian Zionism in Britain and the United States of America since 1800*, Ph.D. thesis, Middlesex University, 2002, 68.

³⁴ 森、前掲書、212 頁。

³⁵ 同書、217-8 頁。

³⁶ 同書、218 頁。

³⁷ その理由について上中は 2 つの可能性— (1) キリスト教全体を弾圧するためホーリネスを足掛かりとした、あるいは (2) 「キリスト教全体を救おう」として、「キリスト教の傍流、あるいは薄手な新興宗教みたいなもの」を犠牲にした—を指摘している。上中栄「十五年戦争期のホーリネスと天皇制」、『十五年戦争期の天皇制とキリスト教』、447 頁。さらに、久山康編『近代日本とキリスト教』大正・昭和篇、創文社、1956 年、350 頁、を見よ。

³⁸ 米田勇『中田重治傳』大空社、1996 年、421 頁。

³⁹ 役重、「中田重治のユダヤ人問題理解とホーリネス教会の満州伝道」、174 頁。

⁴⁰ 米田、『中田重治傳』、422 頁。

⁴¹ 森山諭「中田重治」、『キリスト教人名辞典』編集委員会編『キリスト教人名辞典』、日本基督教団出版局、1986 年、1008 頁。

⁴² 米田、『中田重治傳』、24-5 頁。「中田重治」、宇田進他編『新キリスト教辞典』、いのちのことば社、1991 年、955 頁。

⁴³ 芦田道夫『中田重治とホーリネス信仰の形成—その神学的構造と歴史的系譜』福音文書刊行会、2007 年、30-1 頁。中田はコース終了後、ムーディーから「そは神エホバは日なり盾なり。……」という聖書箇所を与えられている。後年、中田はこの聖書箇所を日本とユダヤに当て嵌めてその密接な関係を力説した。米田、『中田重治傳』、82-4 頁を参照。

⁴⁴ 役重、「近代日本の植民地主義と非ユダヤ人シオニズム」、158 頁。

⁴⁵ 「中田重治略伝」、米田勇編『中田重治全集 2』、福音宣教会、1991 年、17 頁。なお、ブラックストーンによる *Jesus is Coming* は神のユダヤ人に対する約束が教会に取って代わられたとする置換神学の誤りを説き、ユダヤ人をパレスチナに帰すことの重要性を強調したとされている。アメリカで 10 万部以上の売り上げを記録し、ディスペンセーション主義の普及に大きな役割を果たした。上坂昇『神の国アメリカの論理—宗教右派によるイスラエル支援、中絶・同性結婚の否認』明石書店、2008 年、108 頁を参照。

⁴⁶ 役重、「中田重治のユダヤ人問題理解とホーリネス教会の満州伝道」、172 頁。

- ⁴⁷ 中田が内村の家の近くで火災が起きた時に生徒を動員して消火作業に当たさせたことから、双方は相接近し再臨運動をするまでに至った。米田、『中田重治傳』、254-7 頁を参照。
- ⁴⁸ 同書、275-6 頁。
- ⁴⁹ 1933 年の新年早々、中田は「今年のラッパ祭」なる一文を発表した。中田はユダヤ教の祭りであるラッパ祭をキリスト再臨の時に聖徒を呼び集める天使の声のようなものとし、今年のラッパ祭は 9 月 21 日に相当すると書いたため、ある人々はこの日に再臨が起こると考えた。同書、450 頁を参照。
- ⁵⁰ その後、1935 年の新年聖会においても「ユダヤ人と日本人の問題」を連続講演している。同書、482 頁を参照。
- ⁵¹ 宮澤正典「昭和前期における日本の対ユダヤ政策」早稲田大学アジア太平洋研究センター『社会科学討究』40(1)、1994 年、65-85 頁、65 頁。
- ⁵² 役重、「中田重治のユダヤ人問題理解とホーリネス教会の満州伝道」、183 頁。さらに、阪東宏『日本のユダヤ人政策 1931-1945—外交史料館文書「ユダヤ人問題」から』未來社、2002 年、365 頁を見よ。
- ⁵³ 役重、「中田重治のユダヤ人問題理解とホーリネス教会の満州伝道」、183 頁。宮澤、「昭和前期における日本の対ユダヤ政策」、81 頁。
- ⁵⁴ 同書、83 頁。宮澤によれば、日本の新聞もユダヤ人問題を積極的に取りあげることにはなかったという。ただ、1935 年にまず『朝日新聞』がヒトラー讃美に転じ、他紙も競って三国同盟を「人類の福祉に貢献すべき世界史の新時代」とうたい、ユダヤ人の弾圧にも共鳴した。宮澤正典「昭和戦時下における新聞の親ナチ・反ユダヤへ傾斜—それに同調しなかった人々（戦前の日本におけるユダヤ教）」同志社大学一神教学際研究センター『一神教学際研究』10、2014 年、7-24 頁、9-10 頁を参照。
- ⁵⁵ 『聖書より見たる日本』、28-43 頁。
- ⁵⁶ 同書、44-54 頁。
- ⁵⁷ 宮沢正典『日本人のユダヤ・イスラエル認識』昭和堂、1980 年、69 頁。
- ⁵⁸ 同書、70 頁。
- ⁵⁹ 『聖書より見たる日本』、14-5 頁。
- ⁶⁰ 同書、77-8、172-4 頁。その他にも「海のしまじま」（イザヤ 24：15）や、「もろもろの島」（イザヤ 42：4、10、12）を日本のことと解釈している。同書、82-3 頁を参照。
- ⁶¹ 岡本文子編『中田重治師述 日本人とユダヤ人』ホーリネス教会出版部、1935 年、79 頁。
- ⁶² 同上。
- ⁶³ 同書、80 頁。
- ⁶⁴ それ以外の動機として、日本人の聖書的ルーツへの関心があったとも考えられる。「我等日本人も其起源を知りたく思ふやうに、英国人も聖書の中に自国を見出さうと苦心した者である。」『聖書より見たる日本』、166 頁を参照。
- ⁶⁵ Botham, Fay. *Almighty God Created the Races: Christianity, Interracial Marriage, and*

American Law, The University of North Carolina Press, 2009, 98-9.

- 66 『中田重治師述 日本人とユダヤ人』、83-4 頁。以下の主張には、彼がセム、ハム、ヤペテを人種と結び付けて理解していたことが表れている。「『神ヤペテを大ならしめたまはん』とある通り、過去幾世紀か神の祝福はヤペテの子孫の上に置かれ、白人は世界の果々にまで手を伸ばすようになった。『彼はセムの天幕に居住はん』とはどういふ意味であるか？その一つはヤペテの子孫がセムの領土内に入るといふ事である。事実にて於てペルシヤ人及び印度人は所謂インド・ユーロピアンでヤペテの子孫であるが、あの通りアジア大陸＝セムの領土内に居住して居る。「ハムはお気の毒乍ら聖書に示された様な役割を務める事に依つて、己が天職を全うするのである。アフリカ土人や北米にある黒人などは、どうしても人の上に立つて牛耳を執るべき柄ではなく、人の後となつて仕へてこと神より与えられた使命を全うし得るのである」。
- 67 『聖書より見たる日本』、32 頁を参照。
- 68 同書、31 頁。
- 69 同書、136 頁。
- 70 同書、149 頁を参照。緒言 5 頁にも同様の記述が見られる。
- 71 同書、22 頁。
- 72 同書、83、167 頁。
- 73 本論文の 4-1.を見よ。
- 74 『聖書より見たる日本』、116、127-8 頁。
- 75 『中田重治師述 日本人とユダヤ人』、44 頁。
- 76 同書、61 頁。
- 77 同書、83 頁。
- 78 中田は「此の御方に事へ奉る祭司として中心に選ばれた者は、彼のイスラエル民族」と説いている。『中田重治師述 日本人とユダヤ人』、83 頁を参照。
- 79 『民族への警告』、113 頁。
- 80 「又聖書的にいへば、福音はユダヤ人を足場として万国に宣伝へられる事になつて居る」と述べている。『中田重治師述 日本人とユダヤ人』、32-3 頁を参照。
- 81 『聖書より見たる日本』、22 頁。
- 82 『中田重治師述 日本人とユダヤ人』、83 頁。
- 83 同書、84-5 頁。
- 84 『聖書より見たる日本』、4、12、22 頁。
- 85 同書、22-3 頁。
- 86 勝又悦子・勝又直也『生きるユダヤ教—カタチにならないものの強さ』教文館、2016 年、40 頁。
- 87 同上。
- 88 滝川義人『ユダヤを知る事典』東京堂出版、1994 年、105-7 頁。
- 89 勝又・勝又、前掲書、40-1 頁。
- 90 『聖書より見たる日本』、97 頁。

-
- ⁹¹ 『中田重治師述 日本人とユダヤ人』、38 頁。
- ⁹² 同書、41-2 頁。
- ⁹³ 『聖書より見たる日本』、99 頁。
- ⁹⁴ 同書、124-5 頁。
- ⁹⁵ 同書、95-6 頁。
- ⁹⁶ 安江仙弘、中田重治『ユダヤ民族と其動向並此奥義』東洋宣教会ホーリネス教会出版部、1934 年、51 頁。また、「カトリック教の盛んな処では何処でも猶太人が虐められて居る。されば猶太人を虐待する天主教国が神の祝福を受けぬのは当然である。」といった記述も見られる。『聖書より見たる日本』、69 頁を参照。
- ⁹⁷ 『民族への警告』、19 頁。『中田重治師述 日本人とユダヤ人』、35 頁。
- ⁹⁸ マーク・R・アムスタッツ（加藤万里子訳）『エヴァンジェリカルズーアメリカ外交を動かすキリスト教福音主義』太田出版、2014 年、140 頁。
- ⁹⁹ 『中田重治師述 日本人とユダヤ人』、80 頁。
- ¹⁰⁰ 『聖書より見たる日本』、116、127-8 頁。
- ¹⁰¹ そのような中で本稿 4-1.で紹介したような日本に関する預言や日本人の使命も隠されることになったと説く。同書、83、167 頁。
- ¹⁰² 同書、19-21 頁。
- ¹⁰³ 同書、18-9 頁。
- ¹⁰⁴ 『民族への警告』、21 頁。『中田重治師述 日本人とユダヤ人』、42 頁。『聖書より見たる日本』、100-1 頁。
- ¹⁰⁵ 同書、127 頁。
- ¹⁰⁶ 同書、96 頁。
- ¹⁰⁷ 同書、96 頁。
- ¹⁰⁸ 同書、100 頁、等。
- ¹⁰⁹ 宮沢、『日本人のユダヤ・イスラエル認識』、75 頁。さらに、杉田六一『東アジアへ来たユダヤ人』音羽書房刊、105 頁を見よ。
- ¹¹⁰ ホーリネス教会は第一次リバイバル後（再臨運動後）も発展を続け、1927 年には信徒数が 6374 人、1929 年には 1 万人を超えている。黒川知文『日本史におけるキリスト教宣教』教文館、2014 年、277-8 頁。また、1930 年には 4300 名、31 年には 3400 名以上の受洗者があらわれるリバイバルがおきた。米田、『中田重治傳』、429 頁を参照。